

麦魚巻日記

五十四

大正五年七月十九日起筆

特別
14
1919
303





一列に並べ一より十二に列る次第に短う
 ずるにんまきし即ち上圖のいし
 真高作の印受を若蓋に貼す此
 種の者今と邦樂者の家の千々存するのいし
 容辨のこと容易かるべき

平山寺に於て禪僧の唱棒一枚を觀る
 竹物より長七曲尺約三尺四寸幅約一
 寸背面根来朱漆を以て塗り上頭
 紐を以て穿穴あり宛然やいしの如し表
 面に字を刻す曰く

摩訶佛共打

表押

現今用ゆるものと同様を以て下部上頭

こびりんハ陽唐らし竹製幅上下一枚を
 こよのと同一し
 余此器を觀し念指
 動く平山寺の如きありしを
 と出見せしが

此日又唐墨一も購ふ筆の一考の形を摸し其の
 胡開文の毛より所を文筆の鏡あり長さ約四
 寸五分山形の大きき○の如し此の檀木製の
 に入るあり破損し易き形なり
 こぶ登し又竹製かきを磨の刻字あり三角を
 うりこと三十枚例語の狀をさし
 とあり刻字を在也古梁なる支ありのこと也
 往年花前の礼差りし例語を

抱儀(時樂の)

紙の、ぬい本百(巻)分、宿しきる、徳必(巻)つ
なるものなり

カ功激くきり、徳必(巻)に、加いり、前中(巻)客と
接する、ふた、事、一、り、奥用(巻)の、ものを、玩ぶ
又、錯(巻)みの、一、法、なり、おん(巻)心、あり、か、

○前中(巻)男(巻)行(巻)が、伊(巻)豆(巻)苦(巻)れ、入(巻)徳(巻)極(巻)の、地、を、お(巻)し、り、別
業(巻)を、お(巻)ま、り、な、り、と、五(巻)年(巻)前(巻)の、事、一、り、属(巻)了(巻)色(巻)困
の、任(巻)ま、り、と、節(巻)絶(巻)苦(巻)心(巻)さん(巻)な、り、け、り、な、り、け、り、得
ま、り、と、是(巻)れ、一、び、事(巻)の、一、の、物(巻)め、り、な、り、ま、り、
り、り、と、中(巻)見(巻)ま、り、と、事(巻)の、決(巻)死(巻)活(巻)の、事、と
先(巻)の、進(巻)子(巻)の、起(巻)ち、り、と、進(巻)子(巻)の、事、を、あ(巻)ら、り、と、
昔(巻)の、名(巻)を、約(巻)二(巻)里(巻)母(巻)な、り、と、事(巻)の、甚(巻)上(巻)な、り、と、三

崎(巻)折(巻)道(巻)の、途(巻)中(巻)の、一、の、海(巻)村(巻)の、今(巻)の、道(巻)路
七(巻)開(巻)け、馬(巻)車(巻)自(巻)動(巻)車(巻)の、事、一、り、事(巻)の、男(巻)の、別
在(巻)り、某(巻)寺(巻)の、地(巻)に、な、り、と、事(巻)の、地(巻)の、お(巻)な、り、地(巻)も
寺(巻)の、名(巻)を、一、り、属(巻)し、男(巻)の、事、一、り、切(巻)り、ん、と、事(巻)の、
と、名(巻)寺(巻)の、事、一、り、復(巻)り、と、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、
亦(巻)代(巻)傍(巻)地(巻)の、約(巻)束(巻)を、一、り、と、事(巻)の、地(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、
振(巻)り、も、平(巻)表(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、
山(巻)を、一、り、と、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、
若(巻)く、樹(巻)木(巻)を、材(巻)料(巻)と、し、巧(巻)み、と、事(巻)の、地(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、
頂(巻)上(巻)の、四(巻)阿(巻)あ、り、眼(巻)下(巻)と、海(巻)湾(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、
来(巻)路(巻)を、一、り、と、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、
ほ(巻)も、一、り、と、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、事(巻)の、

と云ふ、大隈候と日有協商の成りたる一切を
しりて隠退を心づけざるを甚しき事也候の意
はと云ふも、所振はるる事も人心を新なる
事と云ふも、不可なりし事也、退き得る心
此を以て退えんと心算する所ありし
陛下より内奏ありし事、甚しき事也、併し候が
下より幼き事と内奏ありし事、早計に似
り、いと云ふん事あり、併し併し
外界に往々の経書陰謀を為す事あり、誤解
六誤解と云ふ事あり、危険の事あり、候に
この内奏ありし事、強き事、無き事あり
が、併し候と云ふ、隠退する事、加ふる

中心とする内閣に引つゞき、
この事、甚しき事也、陛下より此の内奏ありし
前の事、振りの事、因に、
事、此の願書を要あり、
九と傳、此の事、
と云ふ、寺内と云ふ、
か、
恐、
と、
養、
と、
こと、

此方伴いとと末の女児一人で、此前より末の時と女児五人
にうらうら賑やうであつたが、其の五人の内長子、其の翌年
歿し、三女も其後逝き、八年間、一男一女を失つたこと
こゝろ来つて、憶おきさすまをえぬ、前年の冬、
本郷が附近の寺の傍に居りて、その夕日夕月、往來し
たが、此處の愛を此處に別在を必しり、此次支那、
ゆつ、こゝろ、その荒いあるが、外臣一件、以来早稲田の同
人皆、そのおかしう思ひぬ、自分もその一人に、こゝろ
来つた訪あり、見る氣も起らぬ、此近傍の勝地と名つ
て、搦田討を任じ、こゝろある、風景あさう、も氣が
乗らぬ、車を走らぬ、前日、或る人、田を、田を、
かゝ、こゝろ、と聞くと、聞くと、こゝろ、清和帝一の相千、と見づ

お人とも、こゝろ、絹本唐扇、扇を、扇い入、塩河の園
ひも、つて貫いんと心、動して居つた、家、こゝろ、
餘、も余の、車、走らぬ、前日、田を、田を、
り、此、此、した、動く、訪、訪、人、七、訪、い、い、る、人、七、る、キ、
来、こ、ま、讀、書、こゝろ、こゝろ、清、閑、の、方、便、と、さ、さ、さ、
中、こゝろ、納、め、の、書、の、書、を、是、の、後、人、を、出、し、
竹、田、の、の、全、集、を、訪、る、お、こ、一、後、七、ん、と、赤、房、
録、や、自、畫、題、語、を、訪、る、を、讀、む、と、見、る、と、流、
お、七、し、ろ、い、お、七、も、ある、こゝろ、こゝろ、之、れ、は、後、又、
を、身、に、讀、む、こゝろ、中、の、を、傳、り、の、お、七、
喜、き、い、い、お、七、も、ある、車、中、行、者、中、巾、箱、本、の、
和、用、と、なる、こゝろ、一、二、冊、あ、つ、た、を、お、七、ひ、
後、七、の、後、

あてを押し扱ふ借むむを讀み、二日河一冊の中
本を書ききり二冊目に移つた位でひまらふといふ
とよい仕事一七六分勉強して譯したが詳しうは
解の癖慣習うあるから割合に字を感ずる却つ
てあつたの興味を覺て感し共但に細字を考す
るあり不便を感し以のを感し年来神経麻痺あ
るの故果左眼●右端の脂肪膨脹して涙管を塞ぎ
言字中涙管に下りて眼下に下ること数々あり近年
七回のことあり眼醫の折解を治めて愈へたが左
七ゆゑの上治療せぬと云ふ花よりつれ、この楓
川橋と云ふと楓川と云ふ骨莖高が別在を云ふて
近きしといふある、此の骨莖高と云ふ、近年

煎茶を流行らせしと云ふ事ある方面に於ては
前年級に於て其遺什、ういゝういゝ考う物な
るうて出に現、三四跋余の七題いへんが格別珍とす
るものある、今の楓川橋を改て其之を換へて
そふ、あるある、ぬゝゝゝゝ八年前と云ふ時、較べ
て何と云ふ進んむ、フットおまゝと奥庭面の碑
ハどううつたうと思ひ出し、牧策の序、馬のつ
て第一の寺を記す、あるある、オオ、撰文、
出来の、建碑、あるある、オオ、撰文、
あるある、建碑、あるある、オオ、撰文、
と城内の、建碑、あるある、オオ、撰文、
後、寺の僧が塩浜と、天下に紹介した、
前中

て無い、随分たいと無の事。を考へてそのがどこに因
田威を寄せ得る所がある。の免れするを讀者の経歴
に似通つた所も不のめりある。自令ついつとも小説を後
あてたか威具を覚えぬのち自分の経歴を多
く語りてちうんてそのうのこころ思ふ所もあ
「白痴お宿」の内は「太郎坊」とその種も「太郎
坊」といふ杯を思ひ別擲して細く昔の傳人
の事と白状するとさう單調に純なる脚をも
きぬが、これを面白く讀むたのも何う自分も觸
るゝやがある。さうしてあつた……塩菜を合ひさ
と方の清冽さ……三伏の北に飲のそめぬこ
とある。随つて此土地の蚊帳の要を知らぬ奴が

るを辨けてまのてか雷丸に事進つて虫の
の氣味は……無の、氣温と朝五六の七
から七十三三日日中……位、さうい
つた……冷しいと云ふが朝の草をこねて
きりかゆる位に併し……の内は数
を得たの、食物の内は川魚と野菜……
る。魚は……汽車……
き……とウ井スキー……
位ある……とウ井スキー……
……
世児が果汁……飲料……
ウ井スキー……

塩原と来りしを^雨天^{あり}を^閉を^筆研^に就^し必^沈黙^收め^ぬ
涉^る世^見の^無聊^と懐^み時^に顧^みる^に壁^静生^息心^法を
試^みる^に数^を親^心を^安し^と又^筆を^弄す^に回^顧す^る
又^八年^前北^山の^事を^前漢^を我^んが^思今^も此^を其^の
感^に勝^れず

塩原の旅舎に宿する三日、驟雨二日に涉り昨夜徹宵霪霪九か
思へく前漢必く其の量也激増せんと早起して推して見
れば乃勢依然然り蓋し深山樹木多く降雨抵ぬ樹根に
停留し平地と大いなる趣を異にするに依り雨後漢流
漲るをそのを畢る山浅く漢狭き所に就て言ふ
つみ試を旅舎のまに就て日閑ふ前漢乃溢ることあり
や即降雨由日涉んば乃量増加す而も屋を犯

す及ハずと又早く過日獨乙の男女来り宿す連日の
降雨に乃量漲く加りてを見て奴皇帰程に上りたりと
海余思へく乃量其を函山嶺乃其の埃を知る、恐く
こも然りしを其の豪雨敷の涉る塩漢と
虽も増れを了る論を要せり但此平地木林林りき
平地と同視すべし耳
兼余も前漢に茅舎あり一橋を架^て其橋僅に一人
一人の歩を許すのみ楓川橋上より見ると茅舎に装笠
する者車甚し趣あり余の此の旅舎を乞ふ所以軍
に漢流を隔て翠恋を印するのみ偶に雨中欄
に立つて望む一鷄雨を衝き悠然橋を渡りて見ると是
れ一種趣味ある光景也但此乃車畫景目回轉毎に一

種悲愴の聲を放ち盡く潮斷息まがり而して深夜枕邊に
此聲も来るを厭ふ可しと為す

楓川樓の寢具功が一七見ふべきあり但し余の居室
に法人衛鑄生の「松風散甘茗」の四字額を掲げ床に枯
木竹石の幅を掛く初めを喜ぶも尚ほさうししか熟視す
九ハ胡公壽の寫本壽款のあり描きたるものを雲林
の七絶を題す曰く

脩篁古木都成老石洞蒼苔亦有花排洞
不須千日酒聊將一筆畫龍蛇

畫七雲林を仿ひ佳幅也此壽の書畫敢て孫と
可くは是くするのと管も此旅舎こそ不似念の者也
恐く楓川の遺什 ころん 以上八月八日於臨河

旅舎記

引渡きたるに西も雨収まりて前河舟漸く
漲り一秋暮あり寂しむる念を為す浴櫓も濁
水に入りて雨も夜も月も能くあり而して増水岸
を渡すもあま前記の事敢て塗敷と云せし
る點も偶々吉田震卿(東伝)紙に由起る
途次来泊民屋中浴論のぬき敵手を得たり
最早此地に飽きたるも吉田のめをり浴在を決し
と紅面のありく収まりを待てるが如く唯を燈
籠に付けたる其ありに浴の偶々漢文を改
の後藤報大らりたる支那皇石に論評す
有歟余らりる支那皇石に論評す

法枕荒干を出しおさる、中ニ昔政陽通道因碑
一帖あり、雅拙まき、佛法名流の題詞あり、宋版
ニ特有の諸點を掲ぐ、面目宋版ニ似たりき者也
多寶の存在深澤に伝ふ、前面大巖石屹出し、田邊
ニ方らし流み、田邊ありて眼下ニ合す、又屋側ニ大樹
あり、無風雅の多寶の存在し、ハ位地の選擇正
ル宜しきを得たるものと見え、隣地ニ一在り、今松
平子音長ふ、斬新まき、畠川弥次ゆり子と、此の
在中佛壇を必し農事ニ切苦あり、先哲を合せ
祀り、香と念佛、香とまき、畠川子、~~...~~
八月十日午前記

午後雨歇み、日也、漸く耀き来り、つらつら、まの石
と、此ニ三人の女、親を伴ひ、散策あり、と出で、十町計り、
行き、路傍ニ深三窟と榜しあるを見、先づ、まきを
訪ふと、柏の花、うらやま、お高きまき、まき、
三窟の入り、お高きまき、お高きまき、
まきを見、茶店、お高きまき、中、天候急、まき、
一、来り、倉皇去りて、帰路、お高きまき、
行かぬ内、驟雨猛烈、に到り、狂風、まき、
傘、お高きまき、
渾身濡れ、宿へ着、
之雨露、滴り、お高きまき、
散策あり、
あるを、余、お高きまき、
あるを、余、お高きまき、

いさ(出舟の湯沸月を為さず)今出らげん舟をあ
いて物つくと笑ふ居室に居り衣類を脱する間もさうく
天地を震撼する轟響雷の吟とろきを吾等を叱す
者の如し如何なる舟の味ハんと欲するんハと
渾身雨露淋漓の味まじむと望まざらうしにとウ
井ノ井一杯を傾け前溪赫色の濁水も赫色の濁
水一帯の帯のこくと濁りも漲り来る(日
上午後三時録)

○十一日夕刻舟を離れ塩原地を以て坂後行を決し
早朝起床、天気が漸く回復の兆候あり前溪の舟
中も減し早朝の量も略々半帯に後下舟を
り、特に朝霧のこ前溪より流れる山ぶいも混交し

喰ふ味自也、魚類は皆其の味といろく誤る、其の
誤るの今こそ鯛や其他の魚類と種々の名
あやも昔よりと魚名古きそのや多し、多しハ大
和目を以て移し、例ハ鯛に多し、多しの種別
あれとも鯛と徳林し、かみし、今日のことと字
名まじり持出して、三九とくを別々に呼ぶこと
さうく、焼くしきことさう杯云ふ、又云く昔し
ハ玉箱の名あり、是利頃の昔、物に初めと土
長の二字をえる、この土箱と、余以て古昔
●沿澤甚なる房さうし、時代より土箱も多し、
りし、さう保し、當時或は食用に供せさう
るん、拾ふる、メダカのみ、きこふ、をひらき、さう

一般よりしむ切りのふりやと談す、十時半に未
と今しなる自動車一時間繰上げて来り
を待たせむも不経海と夜半結束して自
動車に上る旅舎を告ぐしといくむもあ
す途中に多かるるの余等を流しんと未
るに今一車上一揖して別ふ、夕りこそ
んと切せしに極端な道なり又おつく
り出づ、車中より天狗岩と仰き七の
暇下して愛する内自動車一疾走矢の
あつた事をも田舎者も早く那須
の原原に出る、漸やく夜半道は坦
曲るきと人連力愈々加り来時より
短時間西

那須の停車場前に着て、車を一時間待合
のせし十一時四十五分の車、坂後
に投り、停車場の標示、石、那須
四里十町とあり、古田に河川、碑の
村あり、このころ、此の碑を神体と
り、此の碑を白鳳の遺物、金中
重の、群島の多胡の碑、朝鮮
帰化人の建てたる、多胡の碑、
外、三つあり、此の碑を神体と
杖を得ざるを貴戚とす、西那須
里田原とあり、驛あり、此の
意あり、田原に冠する、里の字を

里田原

田原

土質黒毛を帯びたる噴火も来らざるらん此の噴
原を横断したる岩熱火殺生石の神秘傳説を聯
想せざるを得ず此處の昔し狩場なるししかる
狐七身を捕ひしらん此の傳説は狐金毛九尾
の狐を藉りて三人に謂ふも謂ふれざるやあし
言ふ所のむらさき金毛の九尾狐の思想は支
那傳説の感化に相成るものなり此の雷怪狐が
追ひ詰めんとし一片の殺生石とすうとすうと
おかしうし石の力を殺すの力を
あつたらしめし碓氷のいともいへるし傳説今
の碓氷をそと此處に碓氷をいへるや碓氷は
くわいするも別る雷殺氣をうつるえさる此の

石の草味時代は松を硫黄の地上とす上
の所もあししるらん牛馬鳥獸の類を觸る
禁められざるもやあし事なき松をいへ無一と
謂ふ可なり此の傳説はのくとも雷地の或る
實を語らざるも我邦神祕傳説中疎く無
味を以つてあし事なき事なくともいへる人
に印してん是を謂ふらんしとせが而して昔
の怪石を伝力とせし碓氷を絶つるは
を云ふ初めたるらん此人と碓氷の出身も言
又碓氷の人ともいへる何れも是を知らざる
彼人の五んを碓氷の人と為さんと欲す、然る而
もろきいふるは碓氷の役者也成るにけし

と仰費の木をえんと引きつけると人傳るんはるるお
うきき之後世織植の大なるものを呼ぶる事北東
傳の名を以てしること多し傳後とせしむ此の傳の名
の流布したること多し里の字を冠する
驛を日経（通し）の字と冠する驛（通し）来り回
白河とく白河、白河を往て流る道のは若松と
連り、若松古舊名を黒川といふ里の字を冠す
る所より多し此の温家の色里すみ遠くても
のる七里すみとあり、此の城名を忌
名を改めし今の名と人承したること多し若生氏御
の城名を祝つて若松とす、自名を改したること
多し

と支中を二とす、（通し）何れもあは里白の名の錯
綜しをよと興味あること多し、（通し）盤上の其
石を觀ふかめしとて謂ふべき歟、汽車と道り
諸猪苗湖とて上戸驛前の標示を名とす
此の地の海拔千六百九十九尺とす、（通し）高きこと
知らずし往年北湖の外に小湖あり田子沼とす、
今を北の湖と名す、昔し北の湖、今車窓より
見ん心概風を化して今も形を變りてありし、
北の泥の舟を猪苗代湖に注ぐの工事、（通し）を記し、
結果也猪代湖と北の泥後中一の絶縁する、
而も線路を其間を避けて此の勝地を没却す
工事の無凡流歎する、（通し）地くち、漸やく、（通し）盤上

山を望むは昔年噴火の時余偈々新保を歩みしに
 吉田震卿余を引とまきけり噴筒の山を探討せしこ
 とあり今追憶して吉田に當時の事と問ふ吉田の
 事余もも指點してあるの事とを詳説す同く慘状の甚
 かりし之山の背後也日高村のこときとわ村あり
 今も湖底に沈みたる杉を湖中一松の上頭を露し
 すと見ると語り終は箱根草堂の湖の事と久い根
 根もも田原の事あり 鎮倉時代より此湖中
 六十六本の樹松材 其梢をみ上にあらりしなり
 こと古書に見ゆ六十六本と六十六材を代名するに
 そのを論するは是と云ふと 其のの樹の湖中の
 せしと此の橋代も湖のそのをえんとも信やるを得

かといふ語る、活流中山と今もいふのき未の
 吉田久其の山林を指して同く昔も伊豆政宗
 の茶屋といふ或い一説に今伊豆と論んるを此に
 する 其の元身今伊豆と古来雖改るを以つ
 て名あり之れを改めぬしと云ふ 前よりと改宗
 後よりと改宗の改めありと云ふと三代將軍
 が貝子と此におしと云ふも 之のありし事
 地形も申あり 其の事 既叙し せしありん
 又當時お土敷亂し 一所に居たり 伊豆より
 と云ふ事ありしを 今伊豆のみきしと 此の
 土を交へたる日一團有力の地より以つて一團を村
 のを得べし 是れ又杉平一家をおしたる所以

の一より然るも城とむとる業を欲したる先ん其
の業がきしり乃ち城の規模とる業を規模也
後世銀本國合併の主其欲する所愛するに之を
及んやと城の規模を曰し城主の困難想あべき
也と云ふ五時十分荒れと着命命命命と云は徳津
驛に達す北を岩城境界のむる所沼田線の流
流と河賀川上流と云ふ岩の岩を仰るを常
い岸道の緑柑と相反（青）映しと一種の河成也
り白岩の川をらし徳津の一特りもと云ふを得
し津川をほえ遠るに巖麟山を月下に望み
八時五十分驛に在りて父父子戚家族のや
立寄らんを下車する暇も托し遣し余獨り

新潟への時九時三十分

大正五年八月十二日於新潟識

十二日新潟の校友余及び借来港の坂田橋正貞（中
村宗と申の如き）に招き余を（下）あを流る余起りて
一場の演説をあり演説中自分（中）の漸く支境に
入りしこと（中）を説き去りて余氣未だ熾ゆる
りと辯説し詠詔を弄りしこと一番早く歯痛
つと平の志無事の形容を語る余の歯痛
怖者毎に夜の一昨年の夏訪ふ石塚入
（あし石塚もあ）一週間の際を述べし余の歯
牙全体に大修繕を加ふ異んらん其際二本
りの歯牙を抜きし事昨午も先頃歯痛の折を

由路遠き日、若過し石坂、特、汽車中、入、
来り、汽車ありて、次来、初め、その、さ、らん、車中、に、
歯、痛、術、を、施し、一、歯、を、振、れ、除、き、其、の、
さ、め、つ、く、先、刻、右、方、上、顎、中、二、大、の、歯、を、除、い、
て、其、ら、ひ、ま、し、比、最、近、上、歯、を、除、く、こ、と、四、枚、の、
キ、の、遠、く、ゆ、者、毎、に、歯、を、な、つ、と、し、す、ま、
ら、う、け、る、人、思、く、ま、ん、ら、う、板、く、ら、い、歯、が、あ、り、ま、す、
か、と、え、ん、を、自、分、を、侮、辱、し、比、所、方、間、と、云、い、ん、ら、う、と、
自、分、を、お、ろ、く、上、ら、う、と、車、の、間、と、云、い、ん、ら、う、と、
や、四、本、除、の、に、も、不、便、を、感、せ、ぬ、こ、と、を、除、く、の、に、あ、る、
歯、の、自、然、の、な、ら、う、の、と、克、意、の、決、果、は、あ、る、
要、ら、う、い、ら、う、情、勢、の、も、ろ、う、く、ま、り、あ、ら、う、と、敢、て、

遺憾とせしむるに、寧ろ、克、意、の、決、果、は、あ、る、
自、分、の、ゆ、ゑ、あ、り、歯、の、な、ら、う、を、消、化、核、潤、の、改、
善、を、圖、る、の、に、あ、ら、う、と、未、事、を、保、つ、所、以、と、あ、る、自、
分、の、ゆ、ゑ、あ、り、歯、の、な、ら、う、を、除、く、の、に、あ、る、
不、事、同、人、中、に、石、坂、の、こ、と、を、歯、科、の、え、ん、の、あ、
ら、う、と、幸、と、し、深、く、お、い、う、と、謝、せ、ら、う、と、得、ぬ、と、
ま、と、満、場、喝、采、起、る、私、事、を、い、ら、う、と、陳、べ、ら、
ま、し、漸、く、こ、の、後、の、事、に、及、び、最、後、に、又、一、紙、を、
弄、す、回、く、す、後、の、狂、言、次、々、を、著、る、こ、と、
今、回、は、三、回、目、才、一、回、才、二、回、七、紙、が、手、の、着、
け、初、め、の、事、が、今、日、の、事、を、お、し、ら、う、と、我、御、
を、煩、い、す、こ、と、を、い、ら、う、と、目、志、外、の、好、成績、を、え、ら、う、

いまだ浄切つて許さぬ無いの此を城を煥
いさぬ精うひある、いつても自分があるといふ心
をい出して、浄の房上ひ、浄人の御教を、
兼わと法本偷視する、
何となく、
ハ御心を、
りいある、
いのを、
、先此の、
の心、
うら、
御攝い、

とうら、
法入、
との、
堪合、
揚拍、
極、
る、
家族、
浄、
十三日、
去、
あり、

三年忌におきては名釋尼の等俗名ゆゑ(去男校七
年忌三世澄三年忌の法家を併せ言ふ)此日於て
高野山唐中元に相あし染敷殊なるに傳れり
佛事了り河内前市崎友松を依りて書畫骨
董を兄と友松余と號する元樂玉の扁一部小舟
唐言信一巻屏山翁自筆小點の帳を贈る
玉の扁を屏山年律を石教軒市崎養道憲
子等の印を捺す得る屏山の印るる巻教也
女首卷七十二頁の末に至心丙午良月南山寺院新
契の款あり小舟唐信之巻尾に後修具の
と卷首荒干瀬如す右二書如きと殊とすべし
而も屏山翁の手律に傳る余の帰装を杜る

大也 屏山は信帳を喜首に石改ね存稿と
あり各頁行體二行の古あり屏山は書名の詞れ
老然海翁とせ傳ふべきもの余は翁の書と
せず今回法ふて得るを幸とす翁と友松の祖
父也
八月十日新河客舎に於て
○八月十日坂の上路を登り一余の所居の施餉を以
て書し翁の所居の復興の件に關し云々す余は
翁の所居の復興ありと云々も五峯の翁と云々
云々す所居の而して事々容多し運に難きこと見
て已む翁の所居の復興の事一併の書し其の
報に翁の翁に於て翁の翁に於て一書を翁の
翁の翁に於て翁の翁に於て一書を翁の翁の翁

今日の日本は、(東北) 打買満ち常のり、
係中しことあり余の時代に於て一革命を起し
を授くる同志とあり余の社長は、長谷川氏
力する一二の標之を百透かして余をして位地、
あることを得せしめ、
遂に、
題して、
と對抗の位、
て進みし、
承し、
てし、
魯誠信、

と優勢の地を占むる、
社と我の、
に於て、
らず、
こゝに、
末、
権を、
の東北、
す、
の東北、
名を、
此れ、

を以てし又竹書もわくくしとすは新書也の名を以てし
日刊新書と云ふんこと(1)文海を以てくまふん
而して北風新書抄のそとあり新書抄の代名
んことをいふ説しなるも新書抄と改稱して其
暖屋を引かるとせし其書は後にも引ひ續く
こころは續書一つあり余のあつた間三三又り此
る(2)此の詞題(3)申しと解決せんといふ
あゆみ北風新書抄のそとあり新書抄の名を以てせし
るもおまの後書を得へし心算ありそのあはれ
もこゝろをわくわくし恐るる此書を終て其
たつたて敷而して後々を新書抄の代名新書抄
中を復書するのそとあり新書抄の代名新書抄

新書抄のそとあり新書抄の代名新書抄
無城んこと(4)新書抄のそとあり新書抄の代名新書抄
の代名新書抄のそとあり新書抄の代名新書抄
ふの代名新書抄のそとあり新書抄の代名新書抄
を以てし(5)
余の代名新書抄のそとあり新書抄の代名新書抄
而して其の代名新書抄のそとあり新書抄の代名新書抄
新書抄の代名新書抄のそとあり新書抄の代名新書抄
今特く余の代名新書抄のそとあり新書抄の代名新書抄

還家十絶之内

菱歌清唱起横塘月滿烟波遠麗卿借

得河揚船如小、其路間流亦天涼

垂揚一虫、小路波桿、角福、其駐權、既舟在

鶴、鶴、第三堰、天、河、乃、乃、乃、乃、乃

三年、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃

世、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃

福、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃

魚、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃

八月十五日、於新河、客舍、余、謝

物、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃

乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃

塩溪仙

仙之所宅、冷然涼、雲衣、深澗、乃、乃、乃、乃

塩、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃

銀、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃

鞍、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃

題畫

四山、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃

乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃

乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃

乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃

乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃

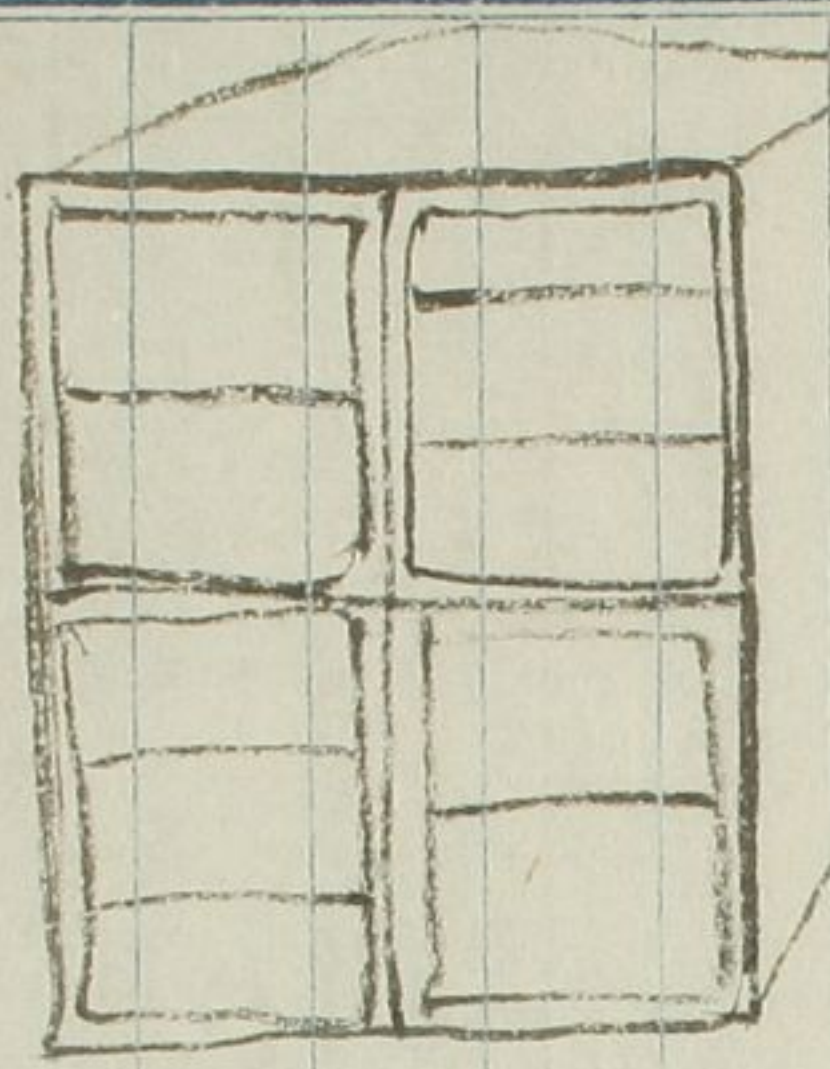
乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃

北、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃

形の中と蠟燭をいんかんかひくみつして清く
たる使わう信りてその扇なるもの也此も並流
流る由に流る工介とていへり信りて及
びす

○角田竹冷を流ひる友人来り竹冷を流す能き一萬巻
をいんかんかひくみつして清く架を善くも
いんかんかひくみつして清く架を善くも
甚道其角田竹冷を流すもの也其の架を
いんかんかひくみつして清く架を善くも
架中いんかんかひくみつして清く架を善くも
いんかんかひくみつして清く架を善くも
いんかんかひくみつして清く架を善くも
いんかんかひくみつして清く架を善くも

あり油法をいんかんかひくみつして清く架を善くも
架中いんかんかひくみつして清く架を善くも
架中いんかんかひくみつして清く架を善くも
架中いんかんかひくみつして清く架を善くも



架中いんかんかひくみつして清く架を善くも
架中いんかんかひくみつして清く架を善くも
架中いんかんかひくみつして清く架を善くも
架中いんかんかひくみつして清く架を善くも

架中いんかんかひくみつして清く架を善くも
架中いんかんかひくみつして清く架を善くも
架中いんかんかひくみつして清く架を善くも
架中いんかんかひくみつして清く架を善くも

一 古網 塔形考燈

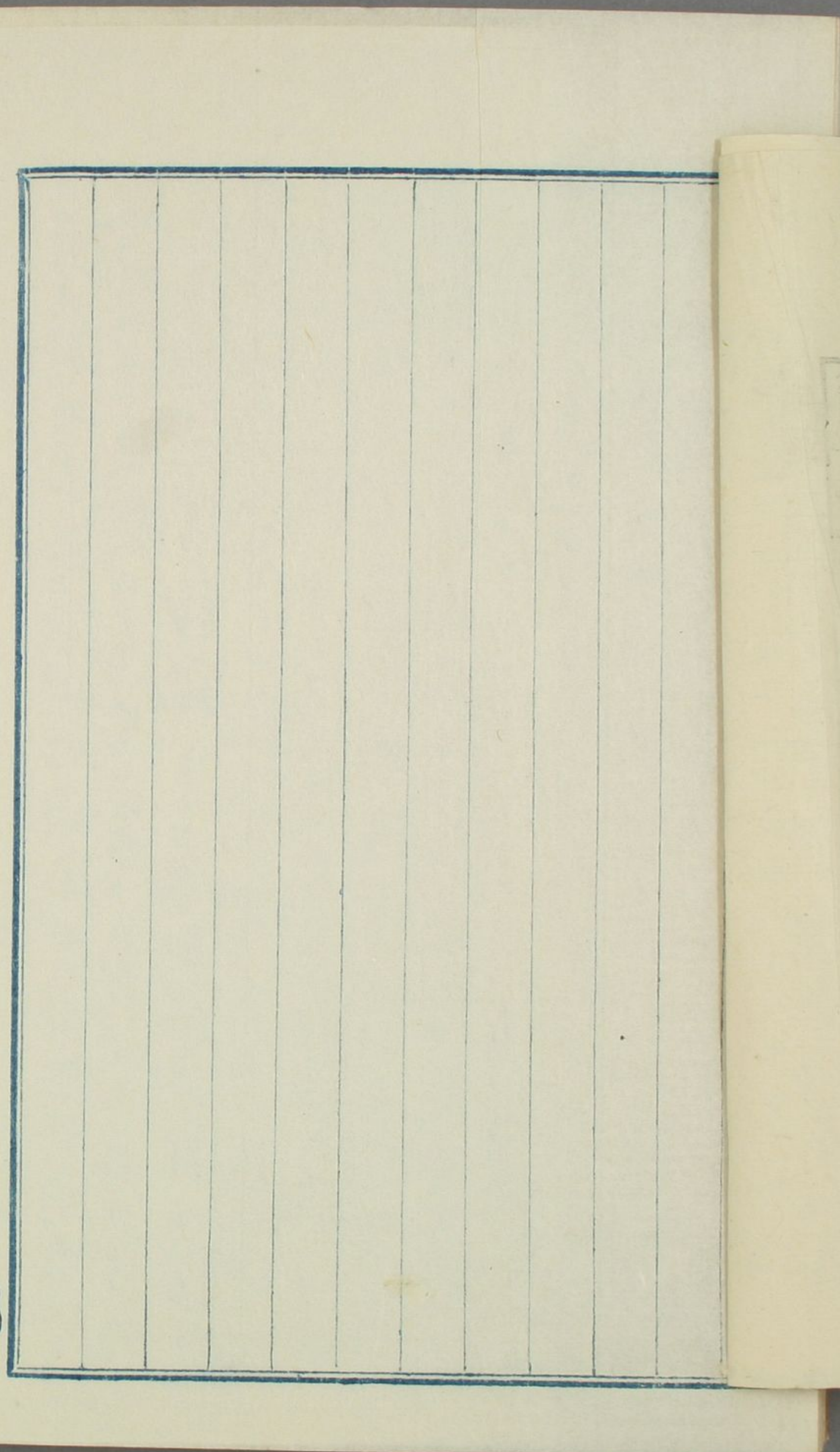
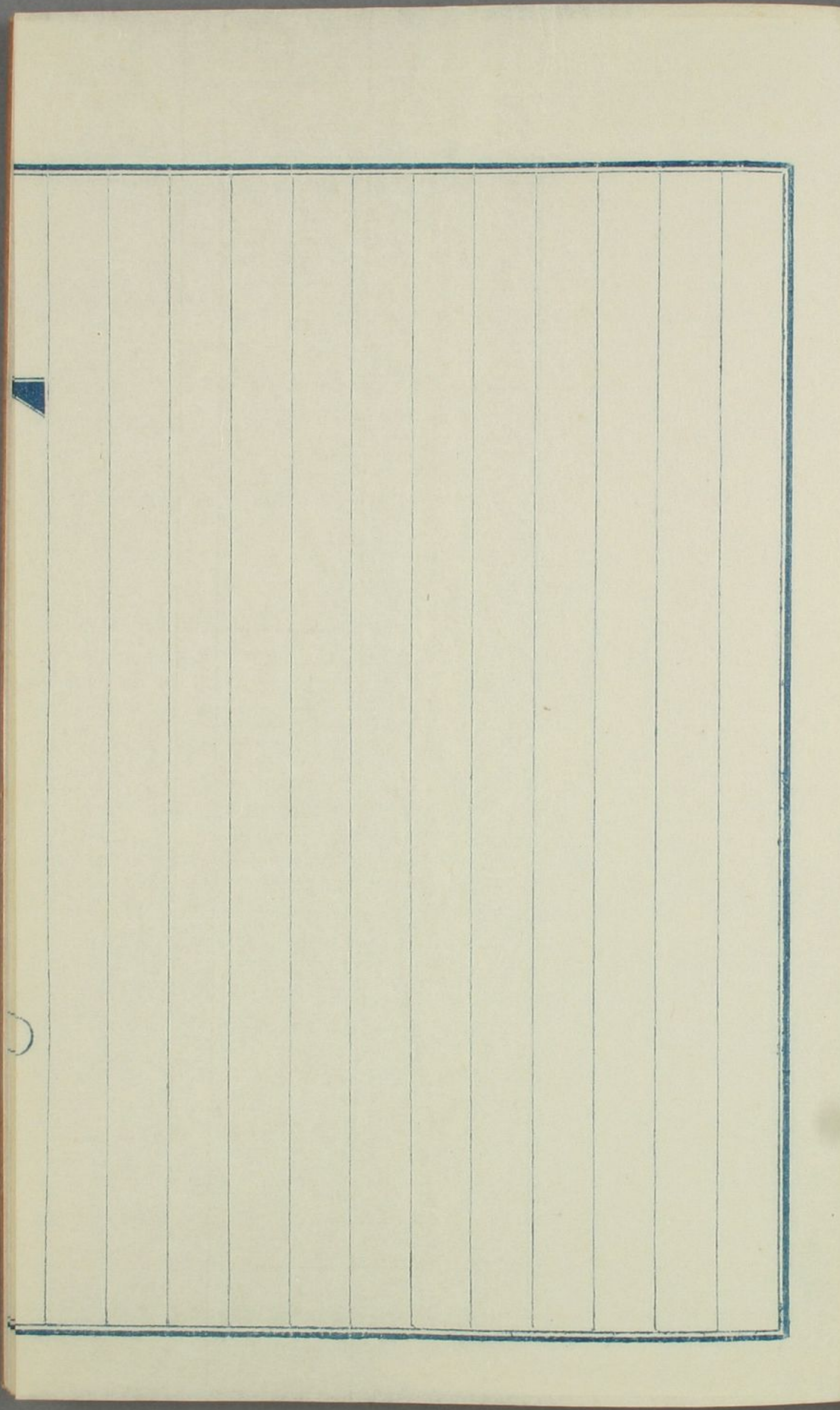
そのルの如き薄平の...
約三寸網六角...
毛押さくし

一 招燈蓮のくま 舟形考燈

舟形...
穴を穿つ...
以上二點...

十五田也

○浮世傳に...
此を亂るの...
司の答めを...
出し...
の浮世傳...
見と...
此より...
新...
あり殊...

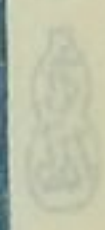


Handwritten Japanese text on a slip of paper pasted onto the right page. The text is written in a cursive style and is mostly illegible due to fading and the angle of the slip.



--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二



--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二

